

指定討論2

発達障害をめぐる諸問題

村本邦子（立命館大学大学院応用人間科学研究科教授）

はじめに

立命館大学の応用人間科学研究科の村本です。今日はピンチヒッターとして頼まれて座っていますが、私は、学生時代は自閉症のことをやっていたんですけれども、長く離れていまして、20年ぐらい虐待ばかりやっていました。ここ5年ほど、スクールカウンセラー先で発達障害の子どもたちに関わる機会が増えましたが、自分の中では、これは専門的にやってきたことではないので、まだまだクエスションというか、保留にしてる部分がありまして、あまり確信を持ってコメントできません。今日は、朝から聞いて一日勉強して、何か感想でも言ってもらったらいいいと言われて引き受けた次第です。

発達凸凹+適応障害という視点

朝一番に、杉山先生が、発達凸凹と適応障害があって発達障害だとおっしゃったことには、すごく納得しました。「立命館にもいますか？」とおっしゃっていましたが、私自身も振り返って、発達凸凹ってすごくあったなと思いますし、自分の周囲、夫とか、子どもたちとか、同僚たちを見ても、やっぱりすごくそれがあるなと思うんですよね。加えて、立命館では、それに多動が加わるとよく適応できるんですよ。だから、そういう意味ではすごく適応しやすい職場であるとも言えるんですけど、ある意味で、何かにこだわって、突出した関心を持って、それを突き詰めていくということは、逆に言うと、あるところがすばっと抜け落ちてしまうんですよね。エネルギー配分から言って必然的に。そういう意味では、何かを専門にするとか、芸術とかいうのは、ある意味で、発達凸凹があるからできることであって、私は、そんなに子どものときから、みなが定型で発達するのがいいのかなと疑問に思っています。ただ、プラス適応障害という、つまり、その凸凹があるため

に、今日も二次障害が話題になりましたけれども、そのことでマイナスが出てくれば出てくるほど、そこに支援が必要ということになるのでしょうか。私自身は、自閉症の子たちと関わっていた時代、それから今もそうなんですけど、こういう子たちとは基本的に気が合うので、大好きなんですよ、視点がおもしろいし、楽しいんですよ。だから、自分自身としては、「うん、すばらしい、いいじゃないか」という気持ちになるところがあるんですね。

診断について

診断についてですが、小谷先生から「診断は贈り物ですよ」というお話がありましたが、私自身は保留です。基本的に、スペクトラムというふうに言くと、非常にあいまいに広くあって、突出して向こう側にいくと、はっきり明確なことが言えるでしょうけど、こっちにすればくほどグレーゾーンというか、虐待もそうなんですけれども、白か黒かがあるわけではなくグラデーションになっていて、突出した黒はわかりやすいけれども、一番多いのはグレーで、白が濃かったり、黒が濃かったりということなんです。その中で、実際に現場で上がってくるケースを見ていくと、多分、今日の杉山先生のお話はそういう話だったんじゃないかと思うんですけども、虐待・トラウマと発達障害と言ったときには、たぶん、古典的な素因か環境かという議論になるのだと思うんですけども、実際には明確に分けられず混在してる人が多いし、実際にケースに関わっていても、これは現象としてはいろいろとあっても環境因が大きいだろうと思うケースとか、これはやっぱり環境よりも本人の素地が大きいんじゃないかなと思うケースもあるし、それから、明らかに環境だろうと思うんだけど、むしろ、本人の素地ということを行った方が結果としてうまくいくというケースもあるわけですよ、戦略的にそれを使うという。

だから、診断もそれと一緒に、明確に迷いなくこうだろうと言えることもあれば、誤診云々というのもありましたけれども、疑問に感じることもあるんですね。診断をもらってきたケースを見たときに、これは絶対環境因だろうと。それを何か本人に薬を飲ませてよしとするようなのってけしからんと

思うような、そういうこともやっぱり事実としては起こっているわけなんですよね。だから、私は、今のところ、診断というのが本人のプラスになればそれはいいし、診断がついたからって特にプラスの見通しもなければ無理してする必要はなかろうと思っています。学校では診断名が得られることで特別な対応をしてもらえるという側面もありますし、それから、ケースによっては薬を使うことで本人が落ちつくケースはありますし、その説明を使うことで本人に対する対応が、先生とかお母さんたちが随分扱いやすくなるというかな、そういう場合は診断がプラスになるだろうと思います。何かやみくもに診断するのがいいのかなというのはクエスチョンです。何度もお断りしますが、私は、特にこのことを専門的にやってきたわけではないので、よく知らない人がちょっと思ったことを言っただけととらえてもらったら結構ですが。

受容と共感について—viewという概念の検討—

受容と共感ということが朝から出てきているんですけど、私としては、楠先生のおっしゃったviewという概念、それはとても納得いくことで、私自身はカウンセリングをする上で、発達障害であろうとなかろうと、受容と共感のみではだめだと思っているんですね。でも、受容と共感が必要条件だと思うんです。混同してはいけないのは、問題行動に対する受容と共感ではなく、その子の存在に対する受容と共感なんですよ。だから、問題が起こったときに、まずは、本人の主観的世界、viewというのは意見と訳されているとおっしゃっていましたが、私の言葉で言えば本人の主観的世界観を理解する、それがその子に対する受容と共感で、それを理解したうえで、では、それと現実というところでどう折り合いをつけていくのかという次の課題があって、そこを飛ばして受容と共感だけでは、それは発達障害じゃなくても問題が生じるだろうと私は思っています。だから、本人のまず主観が受け入れられて、でも、どう言ったらいいかな、要するに、学童期・思春期の子たちの課題というのは、自分というものを保ちながら現実社会でいずれは一人で生きていくと、いろんな人の助けを借りながら何とか生きていける、そういう

力を、助けてもらい方も含めて身につけるというのが一番の課題ですから、大きな目を見たときに、その子がそこに行き着くために何が必要なのか、そこに行くために今、必要な小さな一歩は何かという見方をしていくということが大事だと思っています。

だから、そういう意味で、私は、その子に対する受容と共感が原点としてあって、プラス、じゃあ、その子が現実社会で生きていくにはどうしたらいいか。さっき言った発達凸凹があるけれども、その子なりの仕方で適応障害を起こさずに何とか自分なりの立ち位置を見つけないか、それを援助することが重要だと思います。自分自身のことで言えば、凸凹があっても、適応障害はほぼ起こしてきていないと思いますけれども、自分が適応していくより周囲を自分に適応させてやろうとか、何かそんな感じで生き延びてきたところがあるかなと思うんですけれども、どんな立ち位置でもいいと思うんですよ、どんな立ち位置でもいいけれども、人は一人で生きていけないから、その子なりの仕方で、いろいろあるソーシャルネットワークの一員としてあればいいと思うんですね。そのあり方を一緒に考える、その子の凸凹で現実にはその子が生きていく上で足りないものがあるとすれば、じゃあ、何を足したらその子の場所ができるのか、そんな視点で一緒に考えていければいいんじゃないかなというふうに思っています。

ソーシャルネットワークによってアイデンティティーを確立していく

荒木先生のあひるくらぶの例なんかはその一つなのかなと思うんですけど、アイデンティティーの確立という課題を果たす上で、最近、愛着形成でなく、ソーシャルネットワークによってアイデンティティーを確立していくという、そういう新しいモデルが提示されてるようなんですけども、それはなるほどと思って見ていまして、人は一人では生きていけないけれども、自分をサポートしてくれるネットワークがある中で私というものが立ち得るといえるか、そういう意味では、例えば、そういう場を設定すること自体が一つの援助なんだと思うんですね。

すごく大ざっぱな言い方なんですけれども、どう言うかな、標準のベル型

曲線があったとして、この社会が認める標準はここです。よって部分が狭まれば狭まるほど、はみ出す部分は大きくなっていく。北欧の方ではIQが高すぎる人も特別支援の対象なのだと聞きましたけど、逆の側であっても外れているわけですから、そういう意味では。定型の枠を狭めれば狭めるほどはみ出る人が多くなって、一生懸命、1対1で特別支援の対応をしたってとても追いつかなくなっていくわけです。だから、一番大事なことは、定型の枠を広げるということを一方で考えていかなきゃいけないと思うんですね。今の画一的な社会のあり方を見直し、許容範囲をぐっと広げる中でより幅広くいろんな人たちが含まれていく、そのうえで、外側にはみ出た人たちにより丁寧な対応をしていく、そういうモデルで考えていかなきゃいけないんじゃないかなというふうに私は思っています。目先のことに気をとられるのではなく、トータルとして社会をどう持っていくかということを見ないことには現実的な援助モデルを考えられないのではないかと思います。一方では、目の前にいる子どもがその子らしく生きていくためにどんな支援が必要なのか、今何が必要なのかを考えながら、もっと大きな課題、例えば、5年後、10年後のこの子の生き方、そのために、今必要な一歩は何なのかというところで支援計画を組み立てていく。その一方で、社会全体でどんなシステムを目指して再構築していくのかという長期的な視点が必要かなというふうに思います。

思春期と性

あと、思春期のことで今日あまり出てこなかったんですけど、やはり性の問題の扱いが難しいかなということは思います。今朝、ペドフェリアや性犯罪と隣り合わせの話題が出てきましたが、それを言い始めると、DVの加害者とか、性犯罪の加害者なんかかなりの割合でそういう言い方ができるのかなという気がします。仮にそうだとすると、じゃあ、それをどうできるのかな、それを言うことに意味があるのかなということも考えていくべきのかなと思いました。

もう時間がないのでやめますけれども、私としては、理想的な支援モデルというか、現実に実現可能な学校教育のあり方というのを考えたときに、ど

んな体制をイメージして、それに向けて努力していけばいいのかなという長期的展望みたいなのを聞かせてもらえたら今後考えていきやすいかなというふうに思いました。